様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ１６７８０

研究課題名（和文）視点表現の運用能力育成に重点を置いたオンライン学習交流用教材の開発

研究課題名（英文）Development of Japanese Learning Materials for Language Exchange to Promote Acquisition of Perspective Expressions

研究代表者
末繁　美和（Sueshige, Miwa）

岡山大学・全学教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：６０６３８９９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、国内外の日本語学習者を対象とした視点表現の運用能力の育成に重点を置いたオンライン学習交流用の教材の開発であった。研究成果としては、（1）視点表現習得のためのトピックシラバスの作成、（2）オンライン学習交流用教材の開発とオンライン公開、（3）日本語学習者および日本語母語話者の言語交換による教材の効果検証の3つが挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の社会的・学術的意義は、次の3点である。（1）視点表現の習得を促すための教材を開発した点、（2）オンライン学習交流用教材およびその使用方法をウェブサイトで公開し、広く使用できるようにした点、（3）開発した教材を使用した言語交換を実施し、その効果を検証した点。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop Japanese learning materials to acquire Japanese perspective expressions through online language exchange between Japanese learners and native Japanese speakers. The results of this study include 1) development of a topic syllabus to acquire perspective expressions, 2) development and online availability of Japanese learning materials for language exchange, and 3) verification of the efficacy of learning materials used for language exchange between Japanese learners and native Japanese speakers.

研究分野：日本語教育学、第二言語習得

キーワード：視点表現　運用能力　オンライン学習交流　教材開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

日本語は,「立場志向」や「主観的把握」の言語に分類され,話し手の立場から出来事を描写する傾向がある(水谷，1985)。例えば，英語では，“Someone took my wallet.（誰かが私の財布をとった）”と言えるが，日本語では，自分自身に起った出来事に対して，このような表現を用いると，まるで他人事のような不自然な印象を与える。それゆえ,「財布をとられた」のように，受身表現を用いて，自分の立場から捉えていることを示す必要がある。話し手の視点を表す表現は視点表現と呼ばれ，受身表現以外にも，授受表現や移動表現，使役表現などが含まれる。また，日本語の談話においては，視点を統一する傾向があることが指摘されており，統一された文のほうが日本語母語話者にとっては，理解しやすく読みやすい(坂本・康,2008)。これは，主語や目的語の省略が頻繁に起こる日本語においては,「誰が誰に」という動作の方向性を知る上で，視点表現が大きな役割を果たすからである。

話し手の視点を構文により表す特徴は，日本語特有の現象であり，日本語らしさに大きく影響する項目であると言える。それゆえ，日本語学習者が視点表現をどのように習得するのかについて，これまで多くの研究がなされており，その習得において，次のような困難点が示されている。まず初中級学習者においては，日本語の視点表現における視点制約（人称制限）に対する理解の難しさが報告されている。次に，中上級学習者では,視点が統一された文に読みやすさを示すものの，統一文を産出するには至らないことが示されている。

視点表現自体は，初級で導入される文法項目であるにもかかわらず，上級になっても使いこなせない原因の１つに，多くの日本語教育現場で採用されている文法積み上げ式のシラバスに基づいた教材や教授法の影響が考えられる。文法積み上げ式のシラバスでは，１つ１つの文法項目が個別に導入されるため，視点を表すための表現が複数あることが認識されにくいという問題がある。例えば，複文の視点を統一する際に,「(私は）友達に誘われたけれど，断った」のように受身表現を使用する以外にも，移動表現（例：友達が誘ってきた）や授受表現（例：友達が誘ってくれた）など複数の視点表現が使用可能である。また，視点表現を使いこなせるようになるためには，概念処理の段階で，話し手の立場から事態を捉える習慣をつけなければならない（小柳,2004)。しかし，文法積み上げ式のシラバスでは，習った文法項目の練習に終始しており，話し手の立場からの事態の捉え方や，それをどう表現するかの練習は行われない場合が多い。これまで，視点表現の習得に関する研究は多くなされてきたが，習得を促すための教材および教授法の開発はなされていない。したがって，日本語特有の話し手の視点からの事態認識や表現方法の習得を促すためのトピックシラバスの教材が必要であると考えた。

また，教材を使用する環境としては，近年注目されているオンライン学習交流が効果的であると考えた。この手法を用いれば，場所や時間に関係なく，ネイティブと言語学習ができるという利点がある。教室に足を運ぶ手間がなく，時間の融通が利くことから，学習の回数を増やし，第二言語習得過程で重要であると考えられている日本語のインプットおよびアウトプットの頻度を上げることが可能である。

２．研究の目的

本研究では，日本語の視点表現の習得を促す教材開発およびその効果の検証を行うことを目的とした。具体的には，以下の３点について分析・開発を行った。

(1)　視点表現とトピックの関係性について分析し，視点表現習得のためのトピックシラバスを作成する。

(2)　日本語教科書およびオンライン学習教材の分析を行い，言語習得過程に沿ったタスクおよびその提示順序を検討し，教材開発を行う。

(3)　開発した教材を用い，日本語母語話者および日本語学習者の言語交換を実施し，教材の効果を分析する。

３．研究の方法

本研究で用いた方法について，研究課題ごとに以下に示す。

(1)　発話データの分析に基づくトピックシラバスの作成

日本語母語話者 11 名の 10 のトピックに関するパーソナル・ナラティヴの文字起こしデータの量的・質的分析を行った。具体的には，トピック毎の視点表現の出現頻度，視点表現の使用傾向について分析を行った。その結果を踏まえ，トピックシラバスの作成を行った。

(2)　教科書分析に基づく教材作成

視点表現が主に扱われる初中級の日本語教科書 16 冊および英語の初中級学習者用オンラインレッスン教材について，①トピック、②課の構成、③例文、④練習問題・タスクの分析を行った。また，タンデム学習に関する文献研究を行い，タンデム学習の構成・タスクについて分析を行った。これらの分析結果に基づき，教材作成を行った。

(3)　教材を用いた言語交換

日本語母語話者２名および中級入門レベルの日本語学習者２名（中国語話者１名，韓国語話者１名）をペアにし，4 種類の教材を用いた言語交換のパイロット・スタディを実施した。①レベル判定のための SPOT テスト，②事前・事後の文法テスト，③事前・事後の話すテスト，④事前アンケート，⑤事後インタビュー，⑥言語交換中の録音提出，⑦毎回の言語交換の感想文提出を参加者に課し，データを収集・分析した。COVID-19 の影響により，4～5 回程度の短期間

の言語交換に変更せざるを得なかったため，主に④事前アンケート，⑤事後インタビュー，⑥言語交換中の録音，⑦毎回の言語交換の感想文について質的に分析し，教材の問題点および効果について検討した。

４．研究成果

(1) 視点表現の使用にトピックが与える影響

視点表現がどのトピックにおいて使用される傾向があるのか,日本語母語話者 11 名の発話データの分析を行い，量的・質的分析を行った。まず，量的分析の結果，視点表現のトピック毎の出現頻度については，表 1 に示す通りであった。詳細については，後述の主な発表論文等にある末繁（2019）を参照されたい。

表 1　各トピックにおける視点表現の出現数（末繁，2019:107）

文法項目	1 尊敬	2 教育	3 ショック	4 史上最低	5 不満	6 理不尽	7 部下	8 サービス	9 接客	10 将来	合計
授受	27	12	6	11	11	28	24	26	14	2	165
移動	51	31	26	32	19	59	33	41	40	42	374
受身	6	8	33	12	8	44	4	7	12	7	141
使役	10	6	4	6	2	5	4	2	3	4	46
合計	94	57	69	61	40	136	66	76	69	55	726

次に，発話データについて、質的に分析を行った結果について，以下に示す。

① 授受表現は「くれる系」の出現数が多く，他者への感謝や親切な出来事について語る際に多用されていた。一方で「てくれない」という形で，不満を表す際にも使用されていた。
② 受身表現だけではなく，移動表現も，他者から受けた不快な行為について描写する際に多用されていた。
③ 使役表現は、単独ではなく、授受表現「てもらう」との組み合わせで、感謝を示す際に用いられていた。

授受表現は恩恵性のあるポジティブな出来事に，受身表現および使役表現は，迷惑や被害の意味合いがあるネガティブな出来事に対して使用されやすい傾向があるが，そうではない例もあることが分かった。例えば，中立の受身や移動表現,「させてもらう」「してくれない」のような複合的な表現や否定形の場合である。

以上の結果を踏まえ，2 つの立場（ポジティブ・ネガティブ）に意見が分かれるトピックを扱うことで,複数の視点表現を繰り返し導入･練習できると考えた。トピック選定においては，担当する中級入門クラスの日本語学習者を対象とした聞き取り調査の結果を参考にした。後述する言語交換のパイロット・スタディで用いるトピックシラバスとして，以下の項目を設定した。

① コンビニ（受身表現，使役受身表現）
② マスク（受身表現，移動表現）
③ SNS（受身表現，移動表現，授受表現）
④ カタカナ語（受身表現，授受表現）

(2) オンライン学習交流用教材の開発とオンライン公開

教材作成にあたり，日本語教科書，オンラインレッスン教材，タンデム学習で用いられるタスクの分析を行った。その結果，日本語教科書およびオンラインレッスン教材の構成は，教師主導で進めていくものが多く,「教える側」と「教えられる側」という構図になりやすく，言語形式ばかりに目がいく可能性が高いという問題点が示された。オンラインレッスンとタンデム学習は比較的形態が似ており，1 回の学習時間が教室学習に比べ，比較的短時間で，1 対 1 で口頭でやり取りをしながら学習を進める点で類似していた。しかしながら，後者は，必ずしも「教える側」と「教えられる側」という構図ではなく，協働でタスクを達成するというスタイルであることが多い点で異なっていた。テレコラボレーションにおけるタスクについて分析した O’Dowd and Ware(2009)は，(1) information exchange tasks，(2) comparison and analysis tasks，(3) collaborative tasks の 3 つのタイプに分類できると述べている。これらのタスクを達成するために意味交渉を行い，必要に応じてフィードバックを行うなど，言語形式にも焦点を当てることで，言語習得が促進されると考えられている。したがって,「意味」に焦点が当たるタスクをベースとした教材を作成することで，言語教師ではない母語話者に，明示的な文法説明ばかりを求めることがなくなり，運用の中で言語習得を促進できると言える。

以上を踏まえ，研究成果（1）で示したトピックについて，教材の作成を行った。日本語母語話者と日本語学習者間の各言語それぞれ30分程度の言語交換に使用する日本語教材を4種類作成した。「コンビニ」の教材例を表2に示す。教材の詳細については，後述の主な発表論文等にある末繁（2020）を参照されたい。

表2　言語交換学習用教材「セブンイレブン」（末繁 2020：70）

項目	タスクの種類	内容
読みましょう（5分）		コンビニ24時間営業に関する意見文（400字程度）を読む
話しましょう（10分）	information exchange task	それぞれが読んだ内容を伝え合う
リストアップ（5分）	comparison and analysis tasks	コンビニ24時間営業の良い側面と悪い側面について比較・分析する
考えましょう（10分）	collaborative tasks	コンビニのオーナーという立場で，24時間営業をするか否かを決定する

教材は，4つのパートからなる。まず，「読みましょう」で読む400字程度の文章については，ターゲットの視点表現を入れ，N3以下の語彙を中心とした読み物を作成した。日本語母語話者には日本人の視点，学習者には留学生の視点から書かれた意見文を読ませる形式にした。自身の意見を述べる際に，読み物にある構文や表現を使用して話すことができるため，意見文を採用した。それぞれが異なる情報を持っており，次のタスクでお互いの情報が必要になるため，「話しましょう」では，相手の持っている情報を正確に得る必要性が出てくる。そして，「リストアップ」では，読み物から得た情報やお互いの国の事情を踏まえ，利点や問題点などについて，リストアップし，比較・分析を行う。最後の「考えましょう」では，「コンビニ」の教材を例にとると，「リストアップ」で出した意見に基づき，オーナーという立場で，24時間営業をするか否かを2人で相談し決定する。短時間で多くのやり取りが起こるよう，2人で統一した意思決定をさせる収束的解決タスクを採用した。同様の構成で，「マスク」「SNS」「カタカナ語」についても教材を作成した。

上記の4種類の教材および言語交換の実施方法等の詳細については，ウェブサイトを作成し，広く公開し，希望者が使用できる環境を整えた（後述の［その他］欄を参照）。

（3）教材を用いた言語交換の実施および効果の検証

日本語母語話者2名および中級入門レベルの日本語学習者2名（中国語話者1名，韓国語話者1名）をペアにし，研究成果（2）で示した教材を用いた言語交換のパイロット・スタディを実施した。言語交換の形式に慣れるため，まず対面で実施し，ビデオ通話に移行することとした。週1回、全8回（対面4回，ビデオ通話4回）の言語交換を2〜3か月に渡って実施予定であったが、COVID-19の感染拡大により，途中で中止せざるを得なかった。実施した言語交換は2ペアの合計回数が9回で，うち対面が8回，ビデオ通話が1回であった。したがって，対面での言語交換における効果および問題点の分析結果について中心に述べる。

「3. 研究方法」で述べた収集データの分析を行った結果，教材の利点・効果として，(1) 目標言語でのやり取り（運用）が多くなされていた点，(2) 言語の練習だけではなく意見の交換がなされていた点，(3) 教材のトピックをきっかけに話題が広げられる点が挙げられる。一方，教材の問題点として，(1) タスクに制約が多く指示が複雑である点，(2) 言語使用と思考の両方が求められるタスクでは日本語母語話者主導になる点、(3) 1つの正解が存在するタスクではないため日本語学習者が内容を誤解した状態のままでも進められる点がある。

今後の課題として，当初予定していたビデオ通話での教材の効果測定が十分にできていない点が挙げられる。また，教材を用いた言語交換を長期間継続した場合の視点表現の習得への効果についても，量的・質的に分析を行う必要があると考える。これらの調査結果に基づいた改訂教材の公開および言語交換プロジェクトのモデル提示がなされれば，オンライン学習交流による言語使用の機会の提供や自律学習の助けになると考える。

＜引用文献＞

小柳かおる（2004）『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク.

坂本勝信・康鳳麗（2008)「日本語母語話者の視点の実態について－「視座の統一度に差と文章のわかりやすさの関係」調査と共に－」『常葉学園大学研究紀要（外国語学部)』24 号, pp.205-217.
水谷信子（1985)『日英比較 話し言葉の文法』くろしお出版.
O’Dowd, R., &Ware, P. (2009). Critical issues in telecollaborative task design. *Computer Assisted Language Learning, 22*(2), pp.173-188.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 末繁美和	４．巻 第4号
２．論文標題 視点表現の使用にトピックが与える影響 ―日本語母語話者のナラティヴの分析を通して―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 岡山大学全学教育 ・ 学生支援機構教育研究紀要	６．最初と最後の頁 101-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/58039	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 末繁美和
２．発表標題 視点表現の使用にトピックが与える影響 ―日本語母語話者のナラティヴの分析を通して―
３．学会等名 2016年度第8回日本語教育学会中国地区研究集会
４．発表年 2016年

１．発表者名 末繁美和
２．発表標題 言語交換学習用日本語教材の開発 ～初級から中級への橋渡しとなる教材を目指して～
３．学会等名 日本教育工学会2020年春季全国大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

言語交換学習支援サイト LANEKU（Language Exchange Learning Support Website）, http://laneku.com

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考